

文化・芸術

「fruiter (果物屋)」

1930〜33年 色鉛筆、インク
紙、22.2cm×15.1cm

茂田井武 (1908〜56年)

色彩感覚は、天性のものだと思えます。誰かに教わって覚えるものではありません。茂田井武の色彩も、彼ならではの思わせるような独特の輝きがあります。

それが、パリの街で、いっそう洗練されていったのではないのでしょうか。「ton paris」の小品群の中では、日々の生活の中で目にしたさまざまな情景が描かれています。

中でもきつと職場の近所だったのでしよう、果物店を描いたこの作品のように、カフェ、床屋さん、パン屋さん等々、街の店先がモチーフになっています。描写は、一こまマンガのようにナイーブですが、新鮮な色彩にはハッとさせられます。

この作品のブルーとピンクは、いったいどのように出せたのだろうか、この色の組み合わせは、どこから生まれたのだろうかと思わず見入ってしまいます。彼の天性の感覚とパリの街の化学反応でしょうか。ささやかでも、宝石のように今も輝いています。

(田中)

〈名画の扉〉

大川美術館「茂田井武—パリ青春日記 ton parisを中心に」展から

